

## 文学教材の研究——紫式部『源氏物語』「若紫」の言語表現——

荻原 桂子

九州女子大学人間科学部人間発達学科人間基礎学専攻  
 北九州市八幡西区自由ヶ丘二一（〒八〇七—八五八六）  
 （二〇一七年五月二十六日受付、二〇一七年七月十一日受理）

## はじめに

国際化社会への参入と情報化社会への適応から、昨今の国語科教育においては、「話すこと」「聞くこと」「書くこと」が重視されている。しかし、こうした国際化社会および情報化社会においてさまざまな伝達の基本になる言語を習得するには「読むこと」が大切であり、ここに文学教材の力が発揮される意味がある。本論では、高等学校古典の文学教材として取り上げられる紫式部『源氏物語』「若紫」の言語表現について考察する。

『源氏物語』は作者紫式部（生没年未詳）が夫藤原宣孝の死後、道長の娘、一条天皇の中宮彰子に女房として仕えたときの日記『紫式部日記』に藤原公任が「あなかしこ、このわたりにわかむらさきやさぶらふ」と記述されていることから一〇〇八年十一月一日（敦成親王誕生後の祝儀の日）には成立していたとされている。紫式部が一人で書いたという説、一気に書いたという説など色々取りざたされているが、四〇〇字原稿用紙になおすと約二四〇〇枚、和歌七九五首、帝四代にわたる壮大な長編小説が

描かれた。

『源氏物語』五四帖は「桐壺」から「藤裏葉」までを第一部、「若菜」から「幻」までを第二部、「匂宮三帖」と「宇治十帖」を第三部とする考えや、源氏を主人公とした正編（「桐壺」）、「幻」と源氏死後の子孫を描いた続編（「匂宮」）、「夢浮橋」という二部構成説がある。与謝野晶子は光源氏の陽の性格をもった「桐壺」から「藤裏葉」までを前半とし、源氏と子孫の陰の性格をもった「若菜」から「夢浮橋」までを後半とする二分法を提唱した。文学教材の研究として、紫式部『源氏物語』「若紫」の言語表現について考察する。

## 一、『源氏物語』の注釈書

紫式部が書いた『源氏物語』の原本は現存しない。木版による印刷は仏典や漢籍に限られていたことから、『源氏物語』は平安中期に著されてから江戸初期までは写本で読まれていた。『源氏物語』の写本は本文系統によって「青表紙本の本文を持つ写本」「河

内本の本文を持つ写本」「別本の本文を持つ写本」に分類されている。「青表紙本系」とは、藤原定家が校合したもので、その表紙が青かったことからこう呼ばれている。「河内本系」とは源光行、親行親子が校合したもので、二人が河内守を経験したことからこう呼ばれている。「別本」とは、「青表紙本系」「河内本系」のどちらでもないもので、従一位麗子本、陽明文庫本、東京大学本、ハーバード大学本などがある。

また、平安時代以降数多くの『源氏物語』注釈書が書かれた。注釈書のなかでも、特に明治時代以前までのものを古注釈と呼ぶ。さらに『源氏積』(平安時代末期、藤原伊行)から『河海抄』(一三六〇年代、四辻善成)までのものを「古注」、『花鳥余情』(一四七二年、一条兼良)から『湖月抄』(一六七三年、北村季吟)までのものを「旧注」、それ以後江戸時代末までのものを「新注」と呼んでいる。『源氏積』や『奥入』(一二三三年、藤原定家)といった初期の注釈書は独立したのではなく写本の本文の末尾に書き付けられていた。

国語教科書の文学教材として、本居宣長(一七三〇—一八〇一)<sup>2</sup>の『源氏物語玉の小櫛』(一七九六年)は取り上げられることが多い。

さて、物語はもののおはれを知るを旨とはしたるに、その筋にいたりては、儒仏の教へには背けることも多きぞかし。

そは、まづ人の情のものに感ずることには、善悪邪正さまざまある中に、ことわりに違へることには感ずまじきわざなれども、情は我ながら我が心にもまかせぬことありて、おのづから忍びがたきふしありて、感ずることあるものなり。

源氏の君の上にて言はば、空蟬の君、朧月夜の君、藤壺の中宮などに心をかけて逢ひ給へるは、儒仏などの道にて言はんには、よに上もなき、いみじき不義悪行なれば、ほかにいかばかりのよきことあらんにも、よき人とは言ひがたかるべきに、その不義悪行なるよしをば、さしもたてては言はずして、ただその間のもののおはれの深き方をかへすがへす書きのべて、源氏の君をば旨とよき人の本として、よきことの限りをこの君の上に取り集めたる、これ物語の主旨にして、そのよきあしきは儒仏などの書の善悪と変はりあるけぢめなり。さりとして、かのたぐひの不義をよしとするにはあらず。そのあしきことは今さら言はでもしるく、さるたぐひの罪を論ずることは、おのづからその方の書どもの世にこころあれば、もの遠き物語をまつべきにあらず。

物語は、儒仏などのしたたかなる道のやうに、迷ひをはなれて悟りに入るべき法にもあらず。また国をも家をも身をも治むべき教へにもあらず。ただ世の中の物語なるがゆゑに、さる筋の善悪の論はしばらくさしおきて、さしもかかはらず、ただもののおはれを知る方のよきを、とりたててよしとは

したるなり。

この心ばへをものたたとへて言はば、蓮を植ゑてめでんとする人の、濁りてきたなくはあれども、泥水を蓄ふるがごとし。物語に不義なる恋を書けるも、その濁れる泥をめでてにはあらず、ものあはれの花を咲かせん料ぞかし。

宣長の『源氏物語玉の小櫛』は物語論であり、一七七六(寛政八)年に成立した。九巻あり、総論、年立て(年表)、本文異同の考証、語句の注釈からなる。総論の部分が有名で、『源氏物語』は「物のあはれ」の諸相を描いたもので、読者は『源氏物語』を読むことによつて、「物のあはれ」を知ることができるといふ「物のあはれ論」を展開している。ここでいう「あはれ」とは、「主として平安時代以後、深くしみじみと心をひかれる感じ、またそのような感じをおこさせる状態を表す」(広辞苑第六版)というように、現代では「悲哀・憐憫」を表すことが多くなっていることばである。「物語はものあはれを知るを旨としたる」には、『源氏物語玉の小櫛』が注釈を超えた「評論」であることがわかる。宣長は、紫式部が『源氏物語』を書いた目線にたつて、物語の世界を解説していることがわかる。「その間のものあはれの深き方をかへすがへす書きのべて、源氏の君をば旨とよき人の本として、よきことの限りをこの君の上に取り集めたる」には、道理に反しても特に指摘して言及せず、源氏をもつばら良い人の手本と

しているのが物語の本意であることを読み取っている。「心ばへ」とは、作者紫式部の心のひらめき、『源氏物語』の風情、物語の意味であり、読者は物語を読むことで、作品の「心ばへ」を理解することができる。と説く。「物語に不義なる恋を書けるも、その濁れる泥をめでてにはあらず、ものあはれの花を咲かせん料ぞかし」とは、儒教や仏教などの道理に反する内容が書かれていても、物語とは善悪邪正を論じることには縁遠いものであり、人の感情とは分別ではなく、感動がそのまま声にでるようなものであると論じている。宣長は物語に描かれた不義は、「物のあはれ」を表現するための材料であると読み解いている。宣長は『源氏物語』に、紫式部の「心ばへ」を発見し、「ものあはれを知る」ということが、重要であると評釈するのである。山口志義夫氏は宣長の「物のあわれ論」に対して次のように述べている<sup>3)</sup>。

宣長は『源氏物語』の中に「シナ流の道德とはまったく違つた価値観があることを見出し、それを論証します。まず彼は物語の中でいう「よきあしき」が、儒教や仏教で言う「善悪」とは異なる概念であることを明らかにします。そしてその「よき」と「あしき」を分かつものこそが「物のあわれ」であると言うのです。

今日『源氏物語』は、世界最古の長編小説として、二十カ国以上の国の言語に反訳されています。それは言い換えると、

紫式部が描き本居宣長が読み取った「物のあわれ」が、人類に共通する価値観であるということかも知れません。

宣長の『源氏物語玉の御櫛』は、勸善懲惡や戒律の議論から『源氏物語』を解き放ち、物語の本質について考察した歴史的評論であり、紫式部が『源氏物語』を書いた視点にたつて作品世界に深く寄り添った物語論なのである。

## 二、『源氏物語』の現代語訳

与謝野晶子は八歳頃から読書を始め、一二歳頃には歴史文学、物語文学に親しみ、『源氏物語』を一一、一二歳の頃から素読していた。

式部自筆本が存在しないことから、晶子は「燦然と千古に光る東洋文学の巨篇源氏物語の価値は今さら説く必要もない」と述べながら「私は源氏物語を前後二人の作者の手になったものと認めている」（『新訳源氏物語』「あとがき」大正一四年）と主張し、現代語訳を発表しただけでなく『源氏物語』『帚木』巻から起筆され、『桐壺』巻は後になって書き加えられた」や「筆致の違いなどから『若菜』巻以降は娘大式三位の作品」（『紫式部新考』）であると指摘した。

晶子は、『源氏物語』の現代語訳などを発表しただけでなく、『源氏物語』や紫式部に関するさまざまな考察を何度か発表して

おり、その集大成ともいえる「紫式部新考」は専門の学者たちによる学説史的に重要な論文を集めた論文集に収められている。関礼子氏は「明治の歌人と謝野晶子と王朝の歌人であり物語作家でもある紫式部とのあいだには、さまざまなコンテクスト上の差異が横たわるが、同時に歌や物語というコードによって橋を架け、そこからさらに出発することも十分可能なのである」<sup>4</sup>と指摘する。

明治の歌人である晶子は生涯三度にわたって『源氏物語』の現代語訳に取り組んだ。最初は生家を出奔し、鉄幹と結婚して三年目の一九〇四年（明治三七）五月から『源氏物語講義』を新詩社で始めている（翌年八月迄）。一九〇七年（明治四〇）六月から「閨秀文学会」女性唯一人の講師として講義し（同年九月迄）、一九〇九年（明治四二）四月から一年間自宅毎週二回講義した。「源氏物語講義」は『新訳源氏物語』を手掛ける前から取り組まれたものであった。夫婦と交流のあった小林天眠から依頼された『源氏物語講義』の原稿は一九一〇年（明治四三）から執筆されたが、一九二三年九月に発生した関東大震災により文化学院に置かれていた原稿は消失してしまった（十余年わが書きためし草稿の跡あるべしや学院の灰）『瑠璃光』。

二度目は一九一一年（明治四四）一月金尾種次郎の依頼で、一九一二年（明治四五年）二月から一九一三年（大正二年）一月にかけて『新訳源氏物語』上巻、中巻、下巻として金尾文淵堂

から出版したものである。晶子は『新訳源氏物語』を「自由模写」と記した。

『新訳源氏物語』は全文の翻訳ではなく抄訳であるとされるが、巻ごとにその抄訳の程度は異なっており「桐壺」など冒頭巻のいくつかは概ね原文の半分程度に抄訳されているのに対して、「宇治十帖」の後半の巻では原文より長い訳文になっている。晶子自身は「従来一般に多く読まれていて、難解の嫌いに少ない桐壺巻以下数帖までは、その必要を認めないために、特に多少の抄訳を試みたが、この書の中巻以降は原著を読むことを煩はしがる人々のために意を用ひて、殆ど全訳の法をとつたのである」（同）と述べている。従来の注釈本に敬意を持っていなかった晶子は我流で書きあげ『湖月抄』に対して暴言を吐いている。和歌に関しては原歌そのままのものや修正したもの、読替歌になっているもの、散文になっているものなど統一がない。

三度目は一九三八年（昭和一三）一〇月から一九三九年（昭和一四）九月に『新訳源氏物語』（第一巻から第六巻）として金尾文淵堂から出版したものである。「あとがき」で晶子は「新訳源氏物語」で序文を書いた森林太郎と上田敏、装丁の中沢弘光を指して「三先生に対して粗雑な解と訳文をした罪を二十幾年の間私は恥ぢ続けて来た」と書き「完全なものに書き変へたい」念じたことを吐露している。『新訳源氏物語』に着手したのは昭和七年で三年後の昭和一〇年三月には鉄幹が他界する（源氏をば

一人となりて後に書く紫女年若くわれは然らず）。相前後して中央公論社からは谷崎潤一郎訳『源氏物語』が出版される。谷崎は昭和一〇年九月に着手し、昭和一四年一月谷崎訳『源氏物語』第一回配本刊行、昭和一六年七月第一三回配本完結する。その後、谷崎も『源氏物語』の現代語訳を二回行い、晶子のように計三回『源氏物語』現代語訳に取り組んでいる。全訳となった『新訳源氏物語』は『新訳源氏物語』の華やかさはなくなつたが、鉄幹を喪つた晶子が独力で余命をかけた、原文に忠実な訳になっている。各帖の冒頭に「源氏物語讃歌」の歌が付されている『新訳源氏物語』は「晶子源氏」の決定版といえる。

明治時代末に晶子による現代語訳『源氏物語』が出たことによつて、その後さまざまな作家による現代語訳が刊行されることになる。現代語訳がでることによつて、『源氏物語』の読まれ方は大きく変化した。注釈書を参考にしながら古文で読む『源氏物語』から、現代作家によつてアレンジされた『源氏物語』は、紫式部の「心ばへ」から遠く隔たつてしまったという感は否めない。

さらに、イギリスの東洋学者アーサー・ウェイリー（一八八九～一九六六）は、一九二一年～一九三三年に六巻に分けて英訳『The Tale of Genji』を出版した。ウェイリー訳『The Tale of Genji』がイタリア語、ドイツ語、フランス語などに重訳されたことによつて、『源氏物語』は世界における日本語文学として広まった。



### 三、『源氏物語』 「若紫」の言語表現

『源氏物語』 「若紫」には次のような箇所がある。国語教科書で文学教材として採録されることの多い場面である。

日もいと長きにつれづれなれば、夕暮れのいたう霞みたるにまぎれて、かの小柴垣のもとに立ち出で給ふ。人々は帰し給ひて、惟光朝臣とのぞき給へば、ただこの西面にしも、掛仏くわぶつす奉りて行ふ尼なりけり。簾すだれ少し上げて、花奉るめり。

中の柱に寄りあて、脇息の上に経を置きて、いとなやましげに読みあたる尼君、ただ人と見えず。四十余ばかりにて、いと白うあてに瘦せたれど、つらつきふくらかに、まみのほど、髪かみのうつくしげにそがれたる末も、なかなか長きよりもこよなう今めかしきものかなと、あはれに見給ふ。

清げなる大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊ぶ。中に、十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などの、なえたる着て走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり。髪は扇をひろげたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。

「何なにごとぞや。童べと腹立ち給へるか。」とて、尼君の見上げたるに、少しおぼえたるところあれば、子なめりと見給ふ。雀の子を犬君いぬきみが逃にげかしつる、伏籠ふしごのうちに籠めたりつるも

のを。」とて、いと口惜しと思へり。このゐたる大人、「例れいの心なしの、かかるわざをしてさいなまるこそ、いと心づきなけれ。いづ方へかまかりぬる。いとをかしう、やうやうなりつるものを。鳥などもこそ見つくれ。」とて立ちて行く。髪ゆるるかにいと長く、めやすき人なめり。少納言の乳母とぞ人言ふめるは、この子の後ろ見なるべし。

尼君、「いで、あな幼や。言ふかひなうものし給ふかな。おのがかく今日明日におぼゆる命をば、何とも思したらで、雀慕すずめぼひ給ふほどよ。罪得ることぞと常に聞こゆるを、心憂く。」とて、「こちや。」と言へばついゐたり。

つらつきいとらうたげにて、眉まゆのわたりうちげぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざし、いみじううつくし。ねびゆかむさまゆかしき人かなと、目とまり給ふ。さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人に、いとよう似奉れるが、まもらるるなりけりと思ふにも、涙ぞ落つる。

尼君、髪をかき撫でつつ、「けづることをうるさがり給へど、をかしの御髪や。いとほかなうものし給ふこそ、あはれにうしろめたけれ。かばかりになれば、いとからぬ人もあるものを。故姫君は、十ばかりにて殿に後れ給ひしほど、いみじうものは思ひ知り給へりぞかし。ただ今おのれ見捨て奉らば、いかで世におはせむとすらむ。」とて、いみじく泣くを見給ふも、すすろに悲し。幼心地にも、さすがにうちまもりて、

伏し目になりてうつぶしたるに、こぼれかかりたる髪、つやつやとめでたう見ゆ。

「生い立たむありかも知らぬ若草をおくらす露ぞ消えむそらなき

またみたる大人、「げに。」とうち泣きて、

初草の生ひゆく末も知らぬ間にいかでか露の消えむとすらむ

と聞こゆるほどに、僧都あなたより来て、「こなたはあらはにや侍らむ。今日しも端におはしましけるかな。この上の聖の方に、源氏の中將の、瘡病みまじなひにもし給ひけるを、ただ今なむ聞きつけ侍る。いみじう忍び給ひければ、知り侍らで、ここに侍りながら、御とぶらひにも参でざりける。」とのたまへば、「あないみじや。いとあやしきさまを、人や見つらむ。」とて簾を下ろしつ。「この世にのしり給ふ光源氏、かかるついでに見奉り給はむや。世を捨てたる法師の心地にも、いみじう世の愁へ忘れ、齡伸ぶる人の御ありさまなり。いで御消息聞こえむ。」とて立つ音すれば、帰り給ひぬ。

あはれなる人を見つるかな。かかれば、このすき者どもは、かかる歩きをのみして、よくさるまじき人をも見つくるなりけり。たまさかに立ち出づるだに、かく思ひのほかなることを見よと、をかしう思す。さて、いとうつくしかりつる見かな、何人ならむ、かの人の御代はりに、明け暮れの慰めに

も見ばや、と思ふ心深うつきぬ。

ここでは、『源氏物語』の言語表現が持ち得る紫式部の「文体と表現」を中心に分析する。

「持仏する奉りて行ふ尼なりけり。」「簾少し上げて、花奉るめり。」「ただ人と見えず。」は、源氏の視線による表現で、「あはれに見給ふ。」は物語の語り手の視線による表現である。さまざまな視線から表現することで、源氏の垣間見が多角的に描かれ、作品の奥行きができる。

「何ごとぞや。童べと腹立ち給へるか。」「雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠のうちに籠めたりつるものを。」「例の、心なしの、かかるわざをしてさいなまるこそ、いと心づきなけれ。いづ方へかまかりぬる。いとをかしう、やうやうなりつるものを。烏などもこそ見つくれ。」の会話は、尼君、若紫、女房という三人の会話が並ぶが、登場人物が順番に特定されるように表現されているので、会話が理解できるように工夫されている。

渡辺久寿氏は、文学の表現が持ち得る「芸」を分析するという観点から「総合」巻の表現について「源氏物語が物語の深遠と潜在能力の凄みを教えられた根本的な仕組みや方法が幾重にも重なって織り込められているのである。」と指摘しているように、「若紫」巻にある「つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり」は、人のこころの感じるこころの重層性を浮き上がらせ芸立つ表現であ

る。

「ねびゆかむさまゆかしき人かなと、目とまり給ふ。さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人に、いとよう似奉れるが、まもらるるなりけりと思ふにも、涙ぞ落つる」は、順序として女子の顔つきが美しいという表現があり、その後で源氏がその女子に惹きつけられたのは、容貌が美しいからではなく、藤壺に面影が似ていたから自然と視線が女子に惹きつけられたという深層の理由が明かされる。さらに、感極まつて涙まで流すという源氏の心中の表現は見事である。

「あはれなる人を見つるかな。かかれば、このすき者どもは、かかる歩きをのみして、よくさるまじき人をも見つくるなりけり。たまさかに立ち出づるだに、かく思ひのほかなることを見よと、をかしう思す。さても、いとうつくしかりつる児かな、何人ならむ、かの人の御代はりに、明け暮れの慰めにも見ばや、と思ふ心深うつきぬ。」という表現は、ともに源氏の心中の吐露であるが、前半では、好色な連中が隠れ歩きばかりして想定外の美しい女を見つけることを軽薄に思うが、後半では、この女子には浮ついた関心ではなく、藤壺の形代として得たいと真剣に願う様子が対照的に描かれている。

紫式部は、視点を変えて多角的に表現することで源氏の行為に奥行きを与え、会話をテンポよく挿入することで臨場感をだし、行為の順番を工夫することで源氏の自発的な気持ちを自然に表現

し、心中の思いを反転させることで源氏の藤壺への恋慕の情が女子を形代にしたいという願望に変わる様を表現することに成功している。

## おわりに

生徒の古典指導で重要なことは、「古典に親しませる」工夫をすることである。文部科学省は「古典の指導については、我が国の言語文化を享受し継承・発展させるため、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成する指導を重視する」(『中学校学習指導要領解説—国語編—』二〇〇八年七月)と述べ、二〇一五年一部改正の「伝統的な言語文化に関する事項」においても「古典の世界に触れる」(二年)、「古典の世界を楽しむ」(二年)、「古典を読み、その世界に親しむ」(三年)を挙げている。「古典はおもしろい」と生徒に興味を持たせるには、原文を読ませる学習を中心に、「古典に慣れ親しむ」ことが重要である。阿部俊一氏は「読むという行為は、表現を通して書き手の思考や心情に迫るとともに、それをふまえて読み手としての立場から人間、社会、自然などについて考え、自分の意見をもつに至ることが大切であろう」と指摘し、古典学習に期待を寄せている。古典の魅力を生徒に感じ取らせるような授業展開が必要とされる。古典の言語表現が、現代のわたしたちの言語生活とどのようにつながっているのかを、生徒一人ひとりが実感できるような文学教材を取り上げることが大切



である。紫式部『源氏物語』「若紫」の言語表現には、複雑な現代社会にも当てはまる豊富な表現があることから、古典の文学教材として最適であると考ええる。古典の魅力とは、時間的な異文化と向き合うことであり、そのなかに時を超えて迫りくる普遍的な共感を味わえることにある。

\*紫式部『源氏物語』の本文は『新編日本古典文学全集』（小学館）に、本居宣長『源氏物語玉の小櫛』の本文は『日本古典文学大系』（岩波書店）に拠った。

## 註

- 1 伊藤鉄也『源氏物語本文研究』おうふう、二〇〇二年一月、一九頁。
- 2 本居宣長は、伊勢松阪（現在の三重県松阪市）の商家に生まれ、医者として生活しながら、外国文化の影響を受ける以前の日本人の言葉や考え方について研究し、一七六三年三五歳のときに書いた『紫文要領』を改訂し、全九巻からなる『源氏物語玉の御櫛』を六七歳で書き上げ一七九九年刊行した。
- 3 山口志義夫『源氏物語玉の御櫛』「物のあわれ論」『現代語訳本居宣長選集四』多摩通信社、二〇一三年五月、i~ii頁。
- 4 関礼子「歌／物語／翻訳―与謝野晶子『新訳源氏物語』が直面したもの―」『講座源氏物語研究第12巻』おうふう、二〇〇八年六月、一三六頁。
- 5 渡辺久寿「あさはかなる女、目及ばぬならむかし」の喩性―源氏物語の芸―『表現と文体』明治書院、二〇〇五年三月、二八三頁。
- 6 北川真里氏は「ここで出会った若紫は、藤壺との恋という禁忌による現実世界での破滅を救い、薄倅の美少女を保護するために出家するのを思い留めさせる、いわば源氏の現実世界からの逸脱を阻止する役割を果たしてゆく」と指摘している。「つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり」『テキ・ストツアー源氏物語ファイル』學燈社、二〇〇〇年一月、四五頁。
- 7 米田猛氏は「国語科教育では指導者が教材に惚れ込むことが学習者の学習意欲に大きく影響する」と指摘している。「生徒をとらえる古典指導のあり方」『月刊国語教育』明治図書、二〇〇六年一〇月、四〇頁。
- 8 阿部俊一「教室からの提案②生徒をとらえる古典の授業とは」『月刊国語教育』同掲書、一五頁。

**A study on Japanese language art education  
—A verbal expression of The Tale of Genji—**

Keiko OGIHARA

Course of Principal Human Sciences, Department of Human

Development, Faculty of Humanities,

Kyushu Women's University

1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyusyu-shi

807-8586, Japan

No English abstract